

| | |
|---------|-----------------------------------|
| 称号及び氏名 | 博士（人間科学） 白 雲飛 |
| 学位授与の日付 | 平成26年3月31日 |
| 論文名 | 中国における魂魄観の変遷 — 二元的な区別の観点を中心に — |
| 論文審査委員 | 主 査 大形 徹 副 査 大平 桂一 副 査 斎藤 憲 |

要旨

本研究は中国古代から始まる魂魄観に関する各文献に散在する魂魄の記述を網羅し、二元的な区別の観点を中心にして考察するものである。本論文の結論としては、魂魄の二元的な対立の観点がすべて揃った例は古代の文献には見られないということである。本論文はどのような二元的な対立がどのようにして成立したかを、文献を通じて跡付けたものである。

「魄」が月の満ち欠けとの関係で現れる例が、『尚書』や『禮記』のような古い文献に見られる。この意味の「魄」が「魂魄」の「魄」と結び付けられるようになる過程についても考察した。

第一章の「『春秋左氏傳』における魂魄二元的な見方の萌芽」では、『春秋左氏傳』昭公七年の文について分析した。「陽」の一文字は現れているが、「陰」は現れていない。陰陽の対立と結びつけて「魂魄」の対比を語る箇所は見当たらない。「魄」が「陰」と結びつけて説明されていないことから、「魄」、「陰」と「魂」、「陽」が対比されているのではなく、「魂」は「魄」の内の「陽」なる部分として「魄」に含まれていると解することが、自然な解釈として導かれる。『春秋左氏傳』はまだ「魂」と「魄」の二元的対立に至らない萌芽的な段階で、魂魄二元的な考え方の先鞭に過ぎないことを指摘した。

第二章の「「魂魄」の対比と「天地」の対比の対応付け」では、「魄」の文字は『禮記』において単独で用いられる例がある。これと比較して「魂」が単独で用いられないことは注目すべき事実である。また、「魂魄」の対比と「天地」の対比との対応関係を示すものとして、『禮記』郊特牲第十一「魂氣天に帰し、形魄地に帰す」がよく引用される。しかし、『禮記』において「天地」「上下」と対応付けながら、二元的に対比されるのは、「魂氣」と「骨肉」、或いは「魂氣」と「形魄」であって、「魂」と「魄」の対比ではなく、寧ろ「氣」と「魄」の対比であることを指摘した。さらに、『禮記』におけるこの対比は、「陰陽」の対比とは対応付けられていないが、精神と身体、精神的たましいと身体的たましいの対比と重なっている点は後の魂魄二元論的な見方に繋がるものであると指摘した。

「魂」「魄」が「天地」の対比と対応付けられるのは、『淮南子』が初めてである。しかし、その対比は『禮記』ほど詳しく論じられている訳ではない。また、「陰陽」の対比と結びつけられていない。さらに『禮記』に見られた新しい観点での対比も見られない。

第三章の「「魂魄」の対比と「陰陽」の対比の対応付け」では、『説文解字』と『白虎通』における「魂魄」と「陰陽」の対応関係を考察した。『説文解字』を中心に「魂」を「陽」で特徴づけ、「魄」を「陰」で特徴づける見方が成立した。『淮南子』の中には、魂魄と陰陽を対比させる箇所は見当たらない。しかし、後漢の高誘の『淮南子注』では陰陽による説明が現れる。「魂は陽神」「魄は陰神」と対比され、「魂」と「魄」は「陰陽」と結びついた。これは後の魂魄二元的な考え方の起源の一つになったと考えられる。このようにして、後漢に「魂」を「陽」とし、「魄」を「陰」とする見方は定着したように見えるが、『白虎通』に目を向けると、そのことには重大な疑義が生じる。『白虎通』には、新旧版本の違いがある。それらを比較してみると、「魂」と「陽」、「魄」と「陰」という対応関係は新しい版本のみに現れ、古い版本ではむしろ逆に「魂」と「陰」、「魄」と「陽」と対応付けられている。『説文解字』や『淮南子注』とほぼ同時代の『白虎通』において「魂魄」と「陰陽」の対応関係が通説通りでなかったことからその対応付けはまだ定着していなかったことが分かったと指摘した。

第四章の「「魂」のイメージの展開」では、前漢から唐までの夢の中の死者が「魂」あるいは「魂魄」として意識されたかどうかを考察した。後漢以後、死後の世界のイメージが明確化し、死後の世界には死者の「魂」がいるという考えが普及してくる。他方、身体から離れて往来するイメージは『楚辞』九章抽思「魂一夕にして九逝す」以来のものである。その影響で夢に現われる死者は、死者の世界からやって来た「魂」あるいは「魂魄」であるという考えが自然なものとなったことを考察した。白居易の「長恨歌」に死後の楊貴妃のことを「悠悠たる生死別れて年を経たるも、魂魄曾て来たりて夢に入らず」として、死者のたましいがあの世界から生きた人間の夢にやってくると考えられるようになったのである。詩の中に来ないと書かれているが、当時の一般常識としては来るということである。

第五章の「「魄」のイメージの展開」では、「魄」はたましい的な意味で用いられることを考察した。しかし、「魄」には木の名前や、「間」を意味する意もある。段借の字として用いられることもあった。「魄」の字は、月の満ち欠けの表現にも用いられた。これは満ち欠けする月が生まれたり死んだりする生命の働きの表現だとする解釈があるが、その妥当性の問題を考えるために月相表現としての「魄」の意味について考察した。古い時期には、月相の輝き始めの月が「霸」あるいは「魄」と呼ばれていた。後漢の張衡は「月光」が太陽に照らされて生じるのに対して「魄」は日の翳る側に生じるという見方を示し、月の暗い部分を「魄」と呼ぶ考え方が主流となった。結局月とたましいを結びつける考えは朱熹以前には現れなかったが、考察の過程で「魄」の意味の変遷が天文学的な見方の変化と関連していることが分かった。

第六章の「朱熹の二元的な魂魄観の集大成」では、「魄」の月相表現における意味と「魂魄」の対比における意味の関係について考察した。朱熹は天地、陰陽、魂魄など二つに分かれるものをすべて二元的な対比として説明している。また朱熹は「魂」を月の明るい部分、「魄」を暗い部分としている。月の「魂魄」をたましいの「魂魄」と結びつけて考えている。

朱熹においては、「魂」と「魄」は天地における「鬼神」の、人における現われとなって

いる。それが「盛んなる」と形容されるのは「鬼神」の働きよりも「魂魄」の働きの方が顕著だと考えられたからである。「魂魄」を「煖氣」と「冷氣」で説明する。この「煖冷」の区別を「魂魄」に結び付ける説明は朱熹以前には見られないものである。朱熹はすべてを「氣」として捉えているが、「鬼神」にしても「魂魄」にしても同様である。朱熹は「鬼神」を「陰陽二氣」で分け、「陰」は「鬼」、「陽」は「神」に配分して終わる訳ではなく、そのように分けられて「陰」と「陽」或いは「鬼」と「神」で呼ばれるものをさらに「陰陽」で分けていく。「魂魄」もまた、「鬼神」と同様に、「一氣」によっても「二氣」によっても説明されている。「魂魄」の対比を「天地」と対応付ける見方を『禮記』から受けただけでなく、さらに朱熹は「魂魄」の対比と「鬼神」の対比を結びつけてもいる。朱熹は「魂魄」について『禮記』から影響を受けただけでなく、後漢鄭玄の『禮記』に対する「注」からも魂魄観に関する新たな洞察を得たように思われる。朱熹は「陰陽」の区別を天地万物すべてに適用しており、「魂」と「魄」の「陰陽」による区別はその一面に過ぎないとも言える。さらに朱熹は、この「天」と「地」、「陽」と「陰」の対比を、人間の死との関係でも「魂」と「魄」の対比と結びつけている。

従来、魂魄二元的な考え方は漢代からあると一般に考えられてきたが、区別の観点は、このように文献によって断片的で、総合的な関係は明らかでなかった。それに対して朱熹は、これらの見方をすべて彼の魂魄観に取り入れている。つまり、諸々の文献においてそれぞれ断片的に現れていた「魂」や「魄」に関する二元的な対比を全部「陰陽」に基づいて、「天地」「鬼神」「上下」「生死」などと対比、対応づけ、相互的に解釈していることである。彼がこのような総合的な説明をすることができたのは、彼の見方が陰陽の区別を基本として天地万物を対比の観点で整理するものだからと考えられる。

そして、これらの万物を「陰陽」の観点から単にものとして区別するだけでなく、さらに区別されたものを働きの観点で区別している。「月」を「魂魄」と結びつける見方は、そのような朱熹の総合的な魂魄観を反映した考えの一つである。このように、さまざまな二元的な見方を自らの魂魄観の要素として取り入れ、さらに魂魄概念を天地万物にまで広げて適用する考え方は朱熹による魂魄二元的な見方の集大成と言える。逆に言えば、古代には「魂魄」における「陰陽」「鬼神」「上下」「生死」などのすべての観点を総合した考え方はなかったと言えよう。

学位論文審査結果の要旨

学位論文題目「中国における魂魄観の変遷—二元的な区別の観点を中心に—」について、本審査委員会は、人間社会学研究科人間科学専攻の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下のように評価するという結論に至った。

（１）研究テーマが絞り込まれている。

研究テーマは中国の魂魄観の成立展開の過程を考察するものである。日本でもよく知られている「魂魄」という言葉は、儒教、道教を問わず、中国および日本のさまざまな文献にあらわれる。重要な意味をもつことは認識されており、魂について論述した著作、論文は数多くある。しかし、「魂魄」という熟語に関して詳しく論じたものは見当たらない。これまで本格的に考察したものが皆無であるなかで、本論文がはじめて「魂魄」という語の成り立ち、構造、展開について詳細に考察したといえる。本論文は通説となってきた二元的な対立がどのようにして成立したかを文献を通じて跡付け、綿密に実証したものであり、そのことの意義は大きく博士論文に相応しい内容である。本研究は、「魂魄」に関して「魂魄」の対比と「天地」の対比の対応付け（第二章）、「魂魄」の対比と「陰陽」の対比の対応付け（第三章）、「魂」のイメージの展開（第四章）、「魄」のイメージの展開（第五章）、「朱熹における二元的な魂魄観の集大成（第六章）」でとくに詳しく考察されており、よく絞り込まれたテーマであると評価できる。

（２）論文の方法論が明確である。

本論文では、中国古代から始まる魂魄観に関する、諸文献に散在する記述を総覧し、二元的な区別の観点を中心にして考察することによって、そのような二元的な対立がどのようにして成立したかを、跡付けるものである。対象文献としては春秋戦国から清に至るまでの、古典や文献学の資料を用い、「魂」、「魄」、「魂魄」が現れる箇所について綿密に考察した。研究方法としては、文献ごとに「魂」「魄」が含まれている文章と文脈を読み解き、「魂」と「魄」が対比され、「天地」「陰陽」などと対応付けられているかどうかを考察することによって魂魄観の歴史的変遷を追っている。文献を比較しつつ詳細に考察するという方法論は妥当であり、また説得力のあるものであると評価できる。

（３）研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている。

本論文のテーマである「魂魄」そのものについては、中国および日本に専著もなければ専論もないという状況である。そのなかで本論文は、中国、ギリシャなど古典作品、文献学、天文学、科学史などの著書や論考、「魂」「魄」「魂魄」という語に言及した論文、太陰太陽暦などの暦に関する文献等々も蒐集し、それらの基礎の上で考察を行っている。必要な領域における重要な研究によく目配りをきかせているといえる。

（４）研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している。

基本文献としては中国古典の資料である。それら以外に科学史や暦、天文学などの文献資料を使用している。文献に関しては原典にあたり、最善のテキストを用い、比

較しながら詳細かつ綿密に考察している。研究の素材となる文献、資料、調査データなどは、十分に吟味しているといえる。

(5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。

「魂魄」そのものについての先行研究がほとんどない。本論文がはじめて「魂魄」という語の成り立ち、構造、展開について詳細に考察したものである。まず、春秋戦国時代の書物の中に「魂」、「魄」、「魂魄」という言葉を探った。もっとも古いと考えられる『莊子』や『楚辞』などでは必ずしも熟語としてあらわれておらず、したがって二元論的な意味をもっていたとは考えられない。『尚書』、『春秋左氏伝』、『禮記』、『淮南子』、『説文解字』、『白虎通』、『漢書』、『論衡』などの書物を考察した結果、魂魄と天地、陰陽とを結びつけた二元的な対立観点がすべて揃った例は上古の文献には見られないことがわかった。それが後世、陰陽と結びつけられ、魂が陽、魄が陰とされるようになったのである。とりわけ、後漢の『白虎通』は魂魄の二元論が古い起源をもつことの根拠とされてきたが、版本によっては逆に魂が陰、魄が陽とされるものがあることを明らかにした。次に本論文は、魂魄の二元的な区別の形成過程を検討し、それが『春秋左氏伝』、『説文解字』などに現れることを明らかにした。その集大成は朱子の思想の中にみられるが、そこに至るまでの複雑な過程をも詳細に追究している。これらの考察によって得られた知見は、これまでの簡単な論考には全く見られなかったものである。

(6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている。

本論文は、一步一步、着実に考察を重ねていくというスタイルをとっている。その論証の方法も穏当で破綻がない。また考えるだけのさまざまな角度から考察を試みており、この方面からの考察も必要だといった指摘を受けることがない。また各章ごとに、その章の内容が的確に要約されており、それを確認しつつ、次の章へと進んでいくことができるようになっている。なお議論に用いた資料は最善のテキストを用いている。さらに多くの文献学的資料によって文献の裏付けがなされている。これらのことから、数多くの知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されているといえてよい。

(7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である。

これまで魂魄に関する研究は全く貧弱なものであった。これだけよく知られた言葉でありながら、それを正面から論じた著作、論文は皆無であった。そのなかで、本研究のはたした役割は非常に大きいといえる。魂、魄が天地、陰陽と結びつけられ、さらに月の満ち欠けにも関わるという二元的な考え方が、南宋朱熹の思想のなかにあらわれたものと論じたところに、本研究の独創性を見いだすことができる。つまり、今日の通説では魂は陽、魄は陰とされ、それが魂魄という観念の成立時にすでにそうであったとみなされてきた。ところが本論文の広汎な文献調査によって、それが適切ではなかったことがわかった。本研究によって魂魄に関する研究は飛躍的に進んだといえる。今後、魂魄のことを述べる際、本研究を看過することは許されないであろう。魂魄研究の新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文であるといえる。

以上のような評価を踏まえて、本審査委員会は本論文を博士（人間科学）の学位に値するものと判断する。